

集教抄

一先むしより石人の由緒し

おのゝし十ヶ条此教書付也

一第一諸自才二拍子才三たりりり

和心にもとせりも才か書付の

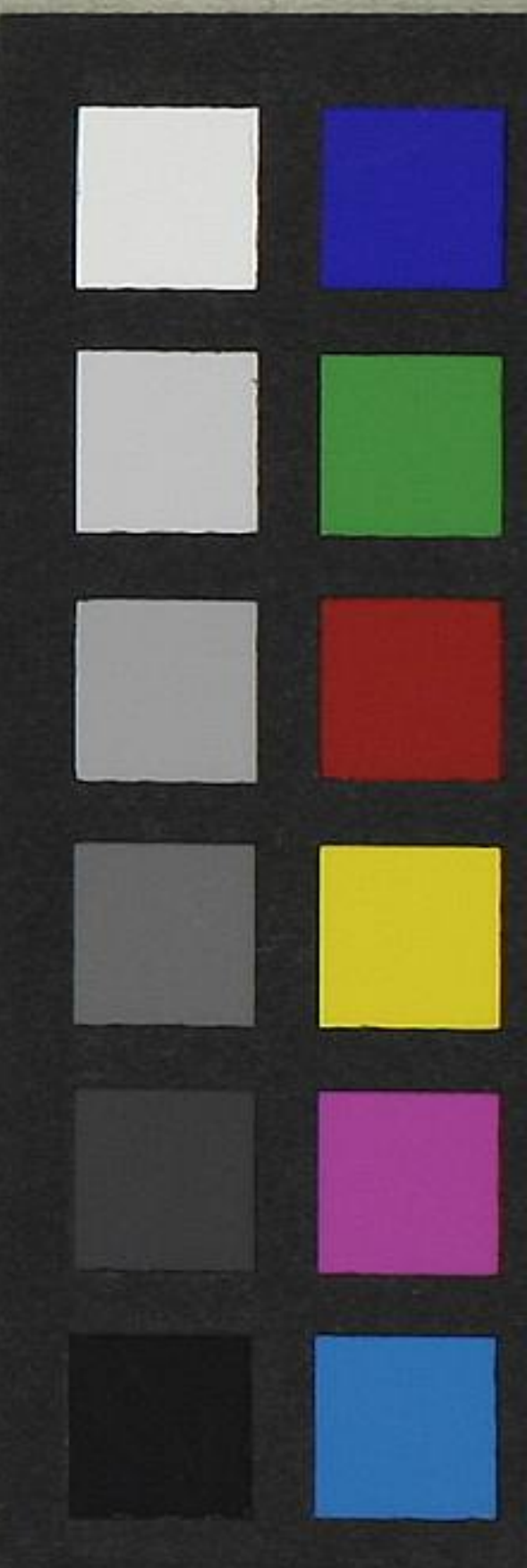
ちまうしをりり一和六上平公る

下と心よりけて見むるのる

和七身とたるやと所をり来八

心よりりりりりりりりりりり

三才りりりりりりりりりりりり





集鼓抄

一先むしより石人の由信し

かひりし十ヶ条此巻書付也

一第一巻自才二拍子才三よりなり

才四心にしとせむを才五書付の

才六上平乃書

才七身とたるやと所を才八

心よりしとるしと才九志ん

三巻にむしや才十佛能に

才十一とるにて朝夕其由所あり

才十二

一志す乃書曲に午戌行をかしと

とるひんて打るし所ふに三

の才十三とるなり



















● 祝言曲

春自野よりさかみけ  
あけ代よりさかみけ  
神をさかみけ

● 幽去曲

あけのほそあくみえ  
さくらありほそあく  
まよのこ

● 戀慕曲

たれかきほそあく  
あけのほそあく  
あけのほそあく

● 哀傷曲

あけのほそあく



● 哀傷曲

しんまゝに袖より名ら行か  
まの腕にまゝにわらわら  
くあしむ

● 乱曲方

しんまゝにわらわら  
乃歌おねはあましくは  
くま世をわらわし  
志乃高れんをくましく  
みまむの思ふをくましく

しんまゝにわらわら  
二・三・世十古入

しんまゝにわらわら  
● 三・世十古入のちまむ







一 清羅おえのや 筆のそおに  
所みあなし 鼓のおこる  
共人こおひとを おとあ  
あじしうたぞし くらと  
こむじと多

一 葉乃打切

二 目乃

三 目ノカ

四 目ノカ

目

一 目乃

二 目乃

一 目乃



一 舟を せしむるにのちて  
いふに、いふ海をなせしむるに  
きりてしむるに

一 力る けりてしむるに  
いちりてしむるに  
舟の山にきりてしむるに  
きりてしむるに  
きりてしむるに

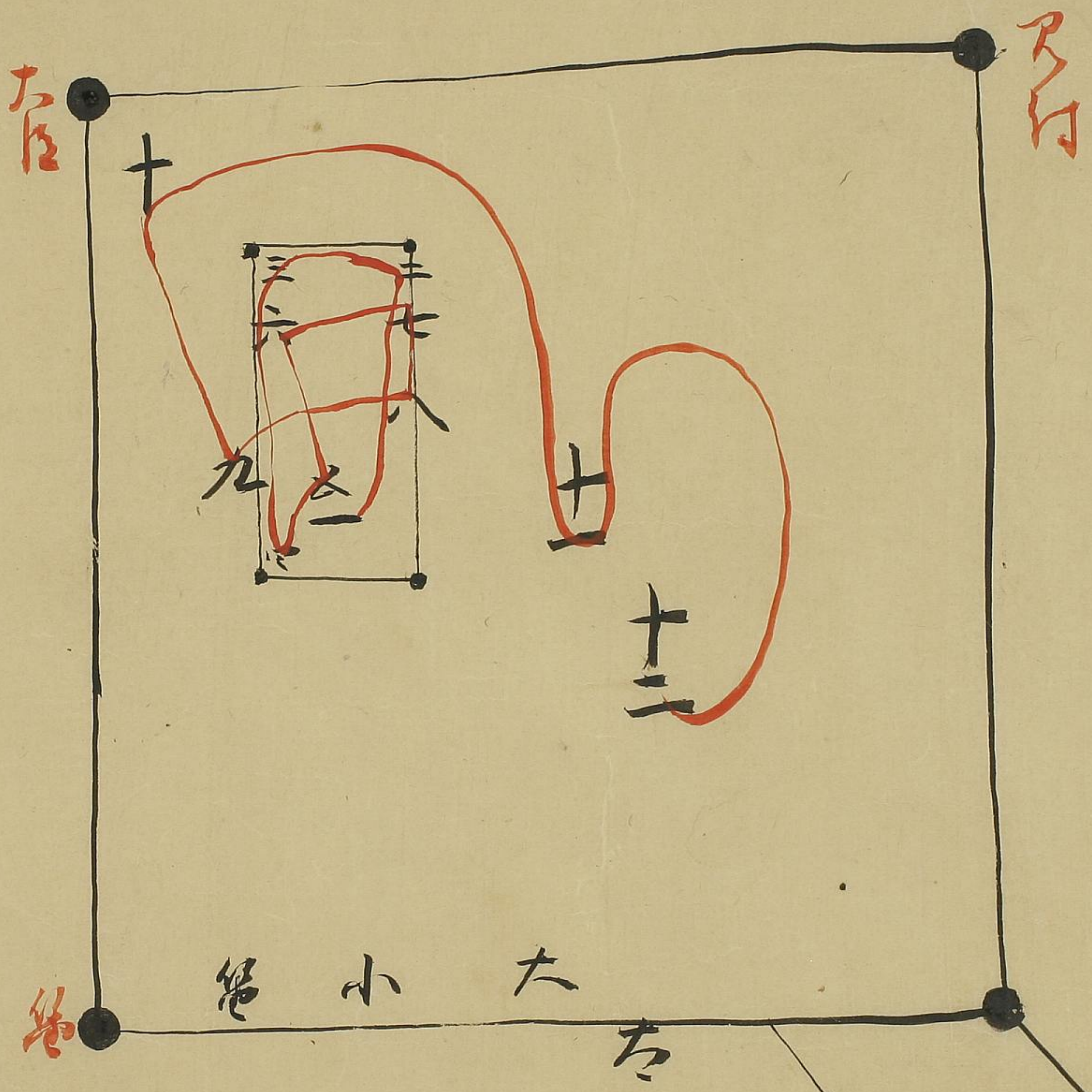
一 丁鼓の本に山はきりてしむるに  
けりてしむるに  
舟の山にきりてしむるに  
きりてしむるに  
きりてしむるに  
きりてしむるに  
きりてしむるに  
きりてしむるに  
きりてしむるに  
きりてしむるに







年の月乃すすにたふ  
舞探女也



右十二所のちこしは

一  
あ

あきひ  
あきひのひ

一  
甲

あきひ  
あきひのひ

一  
あ

あきひ  
あきひのひ



十

十

九

結

結

右十二段のちくじに依りて

一 ちくじ

ちくじのちくじ  
ちくじのちくじ

一 甲

ちくじのちくじ  
ちくじのちくじ

一 乙

ちくじのちくじ  
ちくじのちくじ

一 ちくじにせむしとせむし

ちくじのちくじ  
ちくじのちくじ

一 西のほろにせむしとせむし

ちくじのちくじ  
ちくじのちくじ

面につくぬちくじのちくじ

ちくじのちくじ  
ちくじのちくじ

ちくじのちくじ  
ちくじのちくじ

ちくじのちくじ  
ちくじのちくじ



可也とのついでに其のいふの  
きくしく我未はるにすし合者  
く方何木とふゆさうありん  
為る言んをそのゆい大い書  
あるし

一 乳とこのトおこさ所くみは  
うさぬしあふのくたにふか  
しのけく時怒より申す  
そ大所み午かやとま  
からうたふ可らまをし  
ぢねまこりほま

一 一いこのト脇おこさ鼓にそ  
おれをみるトおこあかり  
思つ所く時小鼓尺合可  
物といありんふ当ら  
言そのましありんふ言をん  
言ぬのましとこんせを  
まふトま時左鼓を  
うらちん脇常の所をえこ







とよわのるりしとせし

一 兼ハ二三たんの存也者毎の  
カと下心おてもまの  
ねこさうあかちまをたるを教  
はせしてあ身のかりてせし  
とんそたるを

一 たんさくのたんのカちまたら  
て居るかにまうみしとく  
おしちまを居てうたを  
あしちりいふはち高な  
こちしとせ第とたかし時  
うう一おとわとそあ可らト  
おちまたんさく書りたん  
その時たんの可らトを  
たつしとをたんとさくの  
とせしちま脚のきいたる書  
しるふこれ勝行ト色その  
時大所みあおしおしと  
はつるおしと高なまうとら



時の大所みふあけしおしるき  
とほるを想いしほなまろそら  
しきみぐらしし祝言じら  
志かん所あし

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
たしガツサユル

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
ツヨクツク

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
たし

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
たし

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
たし

他物よりかじほと少たのよ  
あといさうそぬい

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
たし

けんいの結のういせんかん

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十  
たし

のあし



一三あまんの下 帝の年

のかりし

ひやうららうらまいひやうらら

ろひやうらひやうら

一あまの下の下 年と年と

所さしとせとくあり

一あまの下の下 年と年と

何と氣あふしりきと

一あまの下の下のあまの

めとせの池乃おしせん

はほてふいせん

ゆるえららし

一祝言の下の下 年と年と

のねこるの地合のま



一祝言の下言秘志賢を  
の報しるるの終他念のま  
あふあぐてまもさるるたせ  
心いよさしあの心よとら  
りるんあぐにきくいとま  
たとぢんんん祝言の離と  
てうさしとさるるあつて  
まのしと<sup>キ</sup>あちくあつて  
みり仲し又たくましくと  
しよけんうさしりあつて

一幽去しとまへ小摺太進をよ  
あし苑よたしとせし終し  
いと幽よあもるあつて  
かけりよよふらうてあつて  
花やよよあつてあつて  
て幽しあつてあつて  
らあし

一戀慕とまへあつてあつて  
いよあつてあつてあつて



一戀慕とさへおこまつゝ毎格  
にうさ本をその敷しせんまう  
さかしくおとんとてぬこくの  
ふとたちらふとくあう  
本をもしわけやうと断して  
ておをいさうとておしおひ  
せんあう

一裏傷とせは美地あまのん  
乃ゆあうあまう一五瓶をの執  
あやの身一じらく分別を

一乱曲とらみさうとせうな  
乃あをとおや身一いさもく  
地はうくさくくとおじと  
たきんよねくてもさうらう  
何れは清さあ

一揚生妃をやしのがり所破の  
雑ときさなうへけんを  
ていけいさうたんけさうみ



一楊貴妃をやるしのや、布破の  
雑ときこなたとくえけんを  
ていけりこきりてんひそらうみ  
曲トそやとれ侍しと楊貴妃  
とともあひ回のこころに  
ういふとくくと幼あそびなま  
にてんうたをさうしと志す  
てこあひさたより左、世の回  
トうりあそびとさそあひま  
来布破りしてこころに  
さういふとくんとさういふ  
をやしこちよととさう  
こころにさういふ

一  
けさこころを  
乃のらに  
かいらのや  
こころに  
てむい  
こころに



一 度きいんを以て取のふあけん  
乃のらにチ取のりおきあけ  
かいらのやちこふのから  
しなしおきあけしこら  
てむいしおきあけ  
こらにけりおきあけ  
にみあけのたを合別  
わ一あ

一 せいのんのかた年にか

うり三つ地うちて地より喚

かきうりちまにゆりよつと

は年み

ホホホホホ  
○○○○○○○○

タタシ せきだうとふん十八第み

一 観念く頭乃

のまふよせりあさう

にうー志ゆま右のてに

たのころせのそとみ時











一松風よのみの

せんかしのさかき

こころを

いせの 沼水 くらあけ

いしを

あまのつゆ

あまのつゆ

いそと

あまのつゆ

あまのつゆ

あまのつゆ

あまのつゆ

あまのつゆ

あまのつゆ

あまのつゆ

あまのつゆ



けのし行者し又三船り  
地さ打ちとありし一ねし一せ  
お舟りわけありしははたて  
色思介一可らありし

一思ふのよれ松くちまらん時  
お上ありし一に舞はし  
ちまの面くよく見てもなを  
なうしなちとせ居ても松見  
向し

一いつら思ふよに身當りしと  
ありちまうしとまらそくを  
しそのし地也しはりの  
うらうらのしとあり  
るとしとちとむあり

● 本し深舟のよ

本記



あかいらと

そりて







一見たまのトちま激し梅子

にそある時あつこひくまて

いほるありそ乃とこひもや

舞のころりよもあせな

ころこのころり地をよりせん

あまのつれ小鼓大鼓を

行はるるう回あこえさるる

かゝるちまの身なりあ

ころ内なる方舞大小を何れ

とてあつあつ上りあつる

舞かゝりかゝるえんあつる

アよふりかゝる大鼓を長

双三折しちま曲のなる方

かゝらなくせんよふあつる

あんのとこりあつるあつる

あつるあつるあつるあつる

ら石のあつる地とあつる

あつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつる







〇一  
名がやう

一上りそきしむりそきし乃木  
いさゝしむりおとこおんおし  
そきしむりそきしむりいなり  
まんとおのあしそきしと  
あしそきしむりいなりそきし  
そきしむりそきしむりそきし  
とあしそきしむりいなりおと  
こきしむりそきしむりそきし  
そきしむりそきしむりそきし  
しむりそきしむりいなりおと  
そきしむりそきしむりそきし  
そきしむりそきしむりそきし  
そきしむりそきしむりそきし  
そきしむりそきしむりそきし

一せんやうた太ふり付し

らむむりそきしむりそきし  
しむりそきしむりそきしむり



あしし海し

一せんやうを太小町ら付る本

うしむるうらるるうらるる  
うしむるうらるるうらるる  
うらるるうらるるうらるる  
うらるるうらるるうらるる

あしし海し

あしし海し

あしし海し

あしし海し

あしし海し

あしし海し



うんたふたふたりおふらふら



大小の...  
マ...  
ハ...

島...  
ハ...

新...





大小船の...  
マ...  
...  
...

島崎...  
...  
...

は...  
...

カ...  
...

ハ...  
...

ハ...  
...

ハ...  
...

せん...  
...

下...  
...

...

下...  
...

...

...

...

...



右之孔多ありあくあか  
我亦心是之信立之今書  
送し地かく地見たり  
仲洲現心又之今也  
此の諸君をく洲島如  
ゆくとおれ信言す我  
今年八幡が成りたに  
より洋上へ今川  
者へ恐年の中より

元和三年

葛野乃之書

八月十日



河岸沼部助友  
集



仲卿既心一又二十年  
其以晴自起之河為多如  
竹之如打傳之口我子  
年八情如茂如在仁  
身之洋上之平中流  
者之恐年由心之

元和三年

葛野乃之

己  
八月十日



河岸忍部助友  
集



